

文化財
だより
ふるさと再発見

俳諧への情熱を映す
芭蕉の句碑

妻木町庚申に、松尾芭蕉の句碑があります。江戸時代後期に立てられたものとみられています。高さ八十八cm、横幅七十cm、奥行二十四cm。碑の前面に刻字がありますが、風化やコケによって読みにくくなっています。

「飛よ路飛よ路と奈越露けしや女郎花 者せ越翁」
江戸時代、民衆的な文芸として俳諧が発展しました。慶長年間（一五九六〜）、京都の松永貞徳によって大成され、貞享・元禄（一六八四〜一六八八）のころ、松尾芭蕉が出て、自然と人生を写す「蕉風」を確立し、俳諧を芸術的次元にまで高めました。



芭蕉は、美濃（大垣）へ四回にわたり来遊していて、地域の俳壇に大きな感化を与えました。

山間にある東濃の村々では、街道を通して東西の文化が浸透してきました。元文（一七三六〜）のころ、中馬街道の柿野宿やその近辺の村でも俳諧は盛んでした。下街道沿いの釜戸村には、「蕉風」美濃派の指導者といわれる安藤松軒がいて、大きな句会などを開いていました。

こうして、地域で俳諧を熱心に志す人たちは、俳聖芭蕉の碑を立て、俳諧への精進のため、励ましとしたのでしようか。

句碑は市内に二基、多治見市に二基、瑞浪市に五基あります。これらの碑が、同一時代のものばかりではないにせよ、いかに盛んであったかがしのばれます。

教育夢発信

泉小学校
「学ぶ楽しさ・共に生きる楽しさ」で
満ちあふれる泉小学校にしたい!



「この時間、何としてでもこのことを追究したい!」
「私は、この考えでやった。君はどう?」
「こんな宝物ができたよ。でももっと・・・」

泉小学校では、こんな子ども喜びが、こんなと湧き出る授業・学校にしたいと強く願っています。そのために、授業の中でこんなことを大切にしています。
やりたいという気持ちが高まり、やることや、やり方が分かる問題の出し方。
「ぼくの考えを聞いてよ」「考えがこんなに深まったよ」といえる追究場面の設定。
「今日はこれが宝だ。でも、もっとこんなことをやってみたい」という評価活動の位置付け。



しかし、現実には困難に出会い、とまどったり理解に時間がかかったりする子どももいることも確かです。今、私たちは、一人一人の子どもの学力を保障すること、個性的な成長の保障を一層充実させることが課題であると考え、歩んでいます。幸いなことに、保護者および地域の方々の泉小学校に対する理解と協力という「いずみ」が、一方でこんなと湧き出てきています。学校が地域に支えられる中で、子どもと先生が「いずみ」ってなんてステキな言葉であり、ステキな学校なんだろうと言えるように取り組んでいます。

